



県病医療ニュース

〒870-8511 大分市大字豊饒476番地 TEL097-546-7111(代表) 内線7712:県病ニュース係
 ※当ニュースへのご意見・ご感想は県病ウェブサイトをご利用ください。

心臓血管外科

か し じょう みやく りゅう 下肢静脈瘤について

かしじょうみやくりゅう

下肢静脈瘤は、足の血管(静脈)がぼこぼこコブ(瘤)になってくる病気です(図1)。

女性に多く、妊娠出産を契機に発症することもあります。立ち仕事に従事している方も発症しやすく、また年齢とともに増加し70歳以上では75%(4人に3人)に認められるとのデータもあります。

原因としては、足のくるぶしから足の付け根へ戻っていく大伏在静脈という血管(図2)があり、この血管についている、血液の逆流を防止するための弁が傷んでしまい、逆流を生じることによって発症します。

症状としては見た目で見える血管の瘤、足のだるさ、むくみ、こむら返り(つり)などがあります。ひどくなってくると皮膚の色素沈着(図3)、潰瘍を起こす場合もあります。

治療および予防としては、長時間の立ち仕事をなるべく控える、寝る際には座布団等で少し足を上げて休むのがよいでしょう。また日中は弾性ストッキングという強めのストッキングで足の血流を心臓に戻りやすくするのもよいと思います。かくいう私も長時間の立位での手術時は弾性ストッキングを着用しており、手術後の足のむくみやだるさが軽くなっていると思います。

では手術による治療法ですが、以前はストリッピング手術という大伏在静脈を引っこ抜くという(すこし野蛮な...)手術が主流でした。しかし、現在はレーザーもしくはラジオ波を用いた血管内治療(静脈焼却術)が行なわれており、当院ではラジオ波を用い大伏在静脈にカテーテルにて血管内焼却術を施行しています(図4)。日帰り手術を行っている施設もありますが当院では安全を期し、2泊3日での治療を行っています。静脈瘤自体は命に関わる悪性疾患ではありませんが、気になられる方は当科外来にご相談ください。



図1



図2

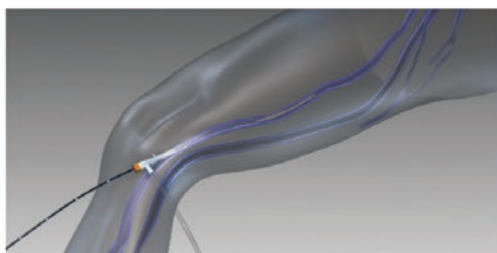


図3

図4



(心臓血管外科 副部長 久田 洋一)



* 図、写真はコヴィディエンジャパン株式会社より提供

※掲載内容の詳細は各科外来・各病棟でお尋ねください。

(裏面をご覧ください)

専門・認定看護師
シリーズ17

ゆっくり、ゆったり

2020年 1月 第138号

～認知症の人と心をつなぐために～

認知症になると、今まではできていたことが次第にできなくなり、自分の気持ちをうまく言葉で表現することが難しくなります。家族や周囲の人からの理解が得られていないと、一人で不安になったり、悩んだり、怒ったり、悲しい気持ちになったりしていることがあります。

認知症の方は「何も分からない」「どうせ忘れてしまう」と思われがちですが、感情や思いがなくなるわけではありません。私たちは言葉には出来ないけれどストレスを抱えていることを理解し、この人は頼りになる、安心できる人と感じてもらい、信頼関係を築くことが大切です。

できないことに目が向いてしまいがちですが、ご本人の好きなこと・得意なことをやっていただくことで自信につながることもあります。若い頃に好きだったものや興味のあったことなど、良い思い出を聞くこともコミュニケーションのきっかけになります。私たちが話に耳を傾け「話させ上手になる」ことが大切です。話にうなずき、相づちを打ち、しっかりと耳を傾けましょう。年齢とともに目や耳、歯の機能が低下します。コミュニケーションを楽しむためにメガネや補聴器、義歯などを用いましょう。



認知症の人は、思い出したり、頭の中で考えたりするのに、時間がかかることがあります。私たちは表情をみながら、急がせないように“ゆっくり、ゆったり”待ってみましょう。「大丈夫ですよ」と気持ちを言葉に出して伝えることで、安心することもあります。認知症の方の症状は人それぞれですし、その日によって状況も異なります。うまくいかないこともあります。介護者の方も周囲に話したり、介護サービスなどを利用したりして、気持ちにゆとりを持つことも大切です。

(認知症看護認定看護師 佐藤 容子)



大分県立病院
ウェブサイトはこちら

※掲載内容の詳細は各科外来・各病棟でお尋ねください。

(裏面をご覧ください)